マンガミライハッカソン原案第三稿
191024　by宮本道人
「あなたの口にあいますように」

◆母の部屋。暗い。
家族写真が置いてある。
アフリカめいた家で、椅子に座ってTV番組を見ている母。手元に大きな肉片のような板ガムめいたものを出している。
TV「7時のニュースです」

タイトルが書かれる「あなたの口にあいますように」
（「世にも奇妙な物語」的なイメージで、口だけ色が異なる）

◆彼女の部屋のひとり暮らしの部屋。明るい。
日本っぽい家。玄関で。
彼女「あがってあがって」
息子「おじゃまします」
息子は五本指靴下を履いている。
彼女「お、その靴下かわいい。どこで買ったの？」
息子「えっと、どこで買ったものだったかな」
彼女「え、最近買ったんじゃないの？　いつも穴あいてる靴下しか履いてなかったし」
息子「いや、まぁ、いいじゃん・・・・・・」
彼女「どうせさ、またお母さんが買ってきたとか、そういうのでしょ？」
息子「靴下とか、特に僕、こだわりないからさ、お母さんがこないだ通販で買って送ってきたのを持ってきただけだよ。どこで買ったかは聞いてない」
彼女「そう・・・・・・お母さん、センスいいね・・・・・・」
キッチンに入る。
息子「食材、いろいろ買ってきた」
彼女「おー。作ろ作ろ」

◆母の部屋。暗い。
アフリカめいた家で、椅子に座ってTV番組を見ている母。大きな肉片のような板ガムめいたものを口に放り込んでいる。捨てられたパッケージには「カミカミ　受信側」と書いてある。
TV「・・・・・・最初のニュースです。イギリスの飯テロリスト団体「テロテロワール」が、食の無差別配信によって、政府関係者に一杯食わせると犯行声明を出しました」

◆彼女の部屋のひとり暮らしの部屋。明るい。
キッチンで料理を始める２人。少し奇妙で使い方の分からないキッチン・調理器具・食材・食器が転がっている。
彼女「ねえ、まだカミカミ買ってないの？」
息子「買ったよ」
彼女「お、じゃあ早くカミフレ登録しようよ」
息子「そうだね、ご飯食べ終わったあとで登録しよう」
彼女「え、なんで今じゃダメなの？　これからどんな風にご飯味わうか、めっちゃ知りたい」
息子「あ、そこのスパイス取って」
彼女「なんでごまかすの？　まさか、浮気してるんじゃないよね？」
息子「なに、とつぜん？　んなわけないじゃん」
彼女「いま誰かに繋いでるってのを見られたくなくて、フレ登録できないんじゃないの」
息子「繋いでない繋いでない」
彼女「うーん、なんかあやしい」
息子「・・・・・・」

◆母の部屋。暗い。
アフリカめいた家で、椅子に座ってTV番組を見ている母。口を動かしている。【くっちゃくっちゃ】
TV「・・・・・・次のニュースです。インドのナノマシン大手企業が食レコの開発に乗り出しました。アフリカと日本の共同開発の食レコデバイスであるカミカミにとっては大きな競合になります」

◆彼女の部屋のひとり暮らしの部屋。明るい。
キッチンで料理の仕上げをしている２人。
彼女「とりあえず、たしかめさせて」
息子「はぁ・・・・・・」
彼女「ほら、はやく口開けてよ」
息子、口を開けると、歯と舌が薄いサランラップ的なもので覆われているのが見える。犬歯の上のところに小さなスイッチがある。右上・右下・左上・左下にそれぞれ「フレンド登録」「シェア」「レコ」「電源」と書いてある。電源とシェアのボタンが光っている。
参考イメージ：「インビザライン」で画像検索して欲しい。マウスピース矯正とも。
http://www.hanarabi-smile.jp/mouthpiece

彼女「やっぱりシェアしてるじゃん」
息子「まぁ」
彼女「・・・・・・お母さんと舌繋いでるの？」
息子「えっ、なんで、いや、そんなことないけど」
彼女「じゃあ浮気してるわけ」
息子「あっ、いや、それは違くて」
彼女「・・・・・・こないださ、金髪にしたのにさ、突然やめた理由、話してたじゃん」
息子「お母さんがいろいろ言ってたって話？」
彼女「そう、その時くらいから、マザコンなのかなって・・・・・・」
息子「いやそれは、単にお母さんが言ってることが正しいと思ったから・・・・・・」
彼女「さっきの靴下とかもそうだよ。私といるときも、いつもお母さんお母さんって・・・・・・」
息子「・・・・・・」

◆母の部屋。暗い。
アフリカめいた家で、椅子に座ってTV番組を見ている母。口を動かしている。【くっちゃくっちゃ】
TV「・・・・・・次のニュースです。カミカミのユーザーから集めたビッグデータを用いて、新しいフィクショナルな食体験を作り出す中国のベンチャーが100億円の投資を集めました・・・・・・ここで一旦CMです」

◆彼女の部屋のひとり暮らしの部屋。明るい。
キッチンからリビングに料理を運ぶ２人。
彼女「別にまぁ、それ自体恥ずかしいことではないし、私だってアイドルの食配信よく噛んでるから、シェアしてることに問題あるとは言わないよ」
息子「うーん、でもあれ、舌タレ使ってる人も多いって聞いたよ？」
彼女「舌タレ？」
息子「舌タレント。顔と舌、別の人担当ってこと。別撮りして、あとでAIに合成させてる」
彼女「なんでそんなことするの？」
息子「顔が良いタレントでも、バカ舌だったりするんでしょ」
彼女「さすがにそれは都市伝説なんじゃないかなぁ。どう考えてもコストかかるでしょ・・・・・・って、話すり替えられた気がする！」
息子「・・・・・・」
彼女「・・・・・・お母さんと舌繋いでるの？」
息子「・・・・・・実はまぁ、ちょっと繋げてる」
彼女「・・・・・・やっぱり」
息子「先に言っておくべきだったよね、本当にごめんなさい・・・・・・」
彼女「・・・・・・正直言うと、一緒にいるとき、あんまり繋げないでほしい気もする」
息子「・・・・・・まぁでも、ずっと通話つなげてるのと同じ感覚だよ」
彼女「その感覚がよくわからないし、それもそれでどうかと思うんですけど」
息子「・・・・・・ごめん」

◆母の部屋。暗い。

アフリカめいた家で、椅子に座ってTV番組を見ている母。口を動かしている。【くっちゃくっちゃ】
TV「・・・・・・受信側のカミカミデバイスに、ついに五時間使用が可能な粒ガムタイプの新型カミカミが登場！　三時間使用が限界の板ガムタイプから、大幅に進化！！・・・・・・」

◆彼女の部屋のひとり暮らしの部屋。明るい。
リビングでご飯を食べ始める２人。
彼女「・・・・・・味覚、食感、香り、温度、口内環境、咀嚼音。あなたの口の中ぜんぶ、あなたのお母さんが今も体験してるんでしょ」
息子「・・・・・・そうだね」
彼女「なんか、2人だけの秘密だと思ってる場所を覗かれているような気がして、全然好きではないんだよね」
息子「会話とか視覚とか共有してるわけじゃないんだけどね・・・・・・カミカミが伝える情報って、大したものじゃないし・・・・・・」
彼女「とにかく、彼氏が口の中を人と共有してるのが嫌ってだけ！」
彼女「・・・・・・お母さんが繋げたいって言ってるの？」
息子「・・・・・・」
彼女「・・・・・・私の手料理のチェックって感じ？」
息子「・・・・・・息子が何食べてるか知りたいって、そんなにおかしいことじゃないんじゃない？」
彼女「この味噌汁、ウチの味じゃない！とか、そういうのいちいち気にしてるわけ？」
息子「・・・・・・そういうんじゃないよ」
彼女「じゃあ、なんで？」
息子「・・・・・・お母さん、あんまり会えないし、日本のご飯直接食べられないから、たまには伝えてあげたい」

◆母の部屋。暗い。
アフリカめいた家で、椅子に座ってTV番組を見ている母。口を動かしている。【くっちゃくっちゃ】
母、TVを消して、窓の方を見る。窓の外に、アフリカめいた景色。

◆彼女の部屋のひとり暮らしの部屋。明るい。
リビングでご飯を食べて終えている２人。
彼女「お母さん、こないだ帰るって言ってたのに、まだ帰ってなかったんだ・・・・・・」
息子「アフリカで、上司に引き止められてるみたい」
彼女「たいへんなんだね・・・・・・」
息子「お母さん、僕に彼女がずっとできなかったの、心配してたし。ちゃんと報告してあげたいなって」
彼女「・・・・・・そういう事言うから・・・・・・いっつも怒れないんだよね・・・・・・」
息子「・・・・・・ごめん」
彼女「・・・・・・なんか、私が悪いみたいになっちゃったじゃん・・・・・・」

彼女、息子の口を開けさせ、犬歯のフレンドボタンを押す。
息子、彼女の口を開けさせ、同じ犬歯のフレンドボタンを押す。
２人の目が合う。
彼女「・・・・・・ねえ」
息子「・・・・・・お母さん、ここまでは繋がなくても、分かってくれると思う」
彼女の口に手をかけて開いたままにして、食レコの電源スイッチ（犬歯の上のところにある）をオフにし、そのまま一気にキスをする。

◆母の部屋。暗い。
椅子に座ってTVを見ていて、口を動かしていた母が、くちゃくちゃを止める。
もぞもぞとガムを丁寧に紙に包んで捨てる。
どういう表情かは分からない。